
黒崎新一の推理日誌

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒崎新一の推理日誌

【Nコード】

N7468A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

黒崎が行くところで度々起こる事件。そして……。 掲載打ち切り

プロローグ

最近の日本はやたらと事件がある事件大国だ。この間だって秋田で子供が二人殺されている。

世の中どうなってしまったのだろう。

これは、そんな世の中に産まれた一人の男の物語である。

第1話：誕生パーティー殺人事件

俺の名は黒崎 新一。

東京の公立高校に通うごく普通高校生だ。

高校では水嶋 ヒロに似てるって事でかなりモテる。

それから、俺には双子の妹がいる。

名は黒崎 綾。

綾は、しっかり者で頼れる存在だ。

しかし、怒るとかなり怖い。

「何してるの？」

と、篠原 愛美に似て可愛い少女が俺に声を掛けた。

彼女が妹の綾だ。

コイツとはクラスが一緒だ。

「何してるって、読者に俺やお前の事を紹介してたんだ。」

「読者って？」

「あ、今のは気にしないでくれ。」

危ない危ない。

「そんな事より、真理絵ちゃんが新一に話があるって。」

真理絵が？

一体、どんな用だろう？

俺は、真理絵に会った。

「新一君、来てくれたんだ。」

と、飯田 里穂に似て可愛い少女が言った。

彼女が真理絵だ。

フルネームは奥村 真理絵。

学校での評判はかなり良い。

「それで、話したのは？」

俺は真理絵に聞いた。

真理絵は、

「あのね、明日のお昼に中学の時の友達の誕生会があつて、それに招待されてるの。」

「それで？」

「招待された人や、友達は何氏がいるの。」

「しかも、皆彼氏を連れてくるみたいでさ。」

「だけど、私にはいないから……。」

「だから、一日だけ私の彼氏になつてくれない？」

「何で？」

「いないならいいってハッキリ言えばいいだろ？」

「いるって言っちゃったんだ。今更言えないよ。」

と、涙ぐむ真理絵。

「そう言う事なら……。」

と、俺は一日だけ真理絵の彼氏を勤める事にした。

「じゃあ、10時に私の家に来て。」

真理絵は、10時に家に来る様に言った。

俺は、

「解った。」

と言つて、真理絵と別れた。

自宅に帰ると、

「真理絵ちゃんの話つて何だったの？」

と、綾が聞いてきたので俺は、

「お前には関係無い。」

と言つて、部屋に入ってベッドに横になった。

そして翌日、俺は約束通り10時に真理絵の自宅に行った。

すると、真理絵が玄関先で待っていた。

「あ、待つてたんだ。中にいても良かったのに。」

「いや、新一君と何処か行くの初めてだったからつい嬉しくてね。」

「はあ？」

「そんな事より早く行きましょ。」

そう言つて、真理絵は俺の手を繋いで歩き出す。

俺は赤くなりながらも一緒に歩く。

「な、なあ・・・恥ずかしいから放してくれないか？」

「あ、ごめんなさい！つい癖で。」

と、真理絵は手を放す。

癖って・・・どんな癖なんだ、おい。

今時手繫いで歩く女子高生なんかいないぞ？いや、カップルならいるか。

「所で、お友達の家は近くなのか？」

俺は真理絵に聞いた。

「うん。」

と、真理絵は頷き、

「あそこ。」

と、正面の門付きの大きな豪邸を指差した。

それはまるで、ドラえもん、骨川スネオの家を思わせる程の家だった。

「ま、マジであそこなのか！？」

俺が聞くと真理絵は、

「うん。」

と、頷いた。

ははん、随分とお金持ちなご家庭なこと。

門の前に来ると、俺はインターホンを探した。

しかし、インターホンが見当たらない。

「インターホンなら中に入った所だよ。」

と、真理絵。

成る程、いくら探しても見付からない訳だ。

俺達は門を通り、中に入って玄関の前に立った。

扉の横にはインターホンがある。

真理絵は、インターホンを押した。

ピンポン

と、音が鳴る。

すると、

「はい。」

と、インターホンから声がする。

家の主が応答したのだ。

「奥村です。」

と、真理絵。

「あ、真理絵ちゃん。

ちよつと待ってて。」

と、主。

それから暫くすると、扉が開いて主が出てきた。

その主は、新穂 えりかにそっくりで可愛かった。

俺はその可愛さに一目惚れをしそうだったが、必死にそれを堪えた。
真理絵は主に、

「彼氏の黒崎 新一。」

と、俺を紹介した。

「始めまして。川口 咲樹です。」

と、主。

彼女が今宵の物語に重要な人物だ。

川口は、

「どうぞ。」

と、中に入る様促した。

俺と真理絵は、

「お邪魔します。」

と言って中に入った。

中に入ると、正面に真っ直ぐな通路があり、左右に扉がある。

更に通路を進むと、リビングに出れる様になっているのが玄関からハッキリ見える。

また、その途中には、上に行く為の階段がある。

「じゃあ、上に上がりましょう。皆待ってますから。」

と、川口は言って、通路を進むと階段を昇って行った。

俺達は川口から離れない様に付いて歩いた。

階段を登り終えると、左右に道が分かれていた。

川口は、

「こつちよ。」

と、右に曲がり、正面の扉を開けた。

扉の向こうは部屋になっており、人を押し込めば20人は入るスペースだった。

部屋の中央には、数人の男女が円を描いて座っていた。

「お邪魔します。」

と言って、俺と真理絵は部屋に入ると、

「真理絵、久しぶり。」

と、一人の女が真理絵に話し掛けた。

女の子は、橋本 甜歌にそっくりで可愛かった。

彼女の名は、望田^{もちだ} 真子^{まこ}。

望田は、真理絵の中学の頃の同級生だ。

自慢じゃないが、高校ではかなりモテているとの事。

そしてその右隣にいるのが、汀^{みぎわ} 浩一^{こういち}と言う望田の彼氏である。

汀は、堂本 剛に似ていて格好いい。

因みに、マジックが得意。将来はマジシャンになるのが夢なんだとか。

堂本 剛似マジシャン登場か？

更に、その右隣にはメガネを掛けたデブ男がいた。

男の名は、小田^{おた} 国男^{くにお}。

小田は、その名の通りオタクである。

因みに、川口の事が好きらしいが、川口は全く気にしていない。そして隣には、佐藤祐基に似た国枝^{くにえだ} 浩^{ひろし}と言う男がいた。

コイツは、俺の中学の時のパシリで、高校が川口と一緒にいる。また、川口とは交際中だ。

「お、黒崎じゃねえか。」

と、国枝。

「おめえ、何時から俺の事呼び捨てする様になっただんだ？ああ！？」
「何だよ、悪いか？」

国枝は、そう言っで眼を飛ばして来た。
すると、

「浩、やめなさい。」

と、川口。

「すいませんでした。」

国枝は川口に謝った。

俺はそれを見て、

「成る程、ツンデレか。」

と、言っでしまった。

「何！？」

と、国枝は立ち上がり、

「もういっぺん言っでみる！」

と言っで、俺の胸倉を掴む。

俺はそれに対し、

「やめとけ。お前は俺には勝てない。」

と言っで国枝に背負い投げをした。

その瞬間、国枝は背中を床に叩き付けられ、それを見ていた奴らが俺に拍手をする。

「あの、拍手貰っでも嬉しくないんですけど・・・。」
と、俺はそいつらに言っだ。

すると、そいつらが拍手をやめ、部屋中シーンとなっだ。

川口は、

「あ、あたし、ジュース持っで来るね。」

と言っで、場を和ませた。

俺は、

「手伝うよ。」

と言っで、川口と一緒に部屋を出た。

部屋を出ると、

「あの、何か空気悪くして御免な。」

と、俺は川口に謝った。

川口は、

「あ、その事なら気にしないで下さい。悪いのは浩の方なんですから。」

と、俺に言う。

「いや、そう言うんじゃないんだ。」

「へ？」

と、目を点にする川口。

「俺・・・自分で空気悪くして、そこでそこにいるのが苦手なんだよ。」

俺は川口にそう言った。

川口は、

「そうなんですか？」

と、俺に聞く。

「ああ。小さい頃からそうなんだ。」

「大変ですね。」

所で、本当はどうなんです？」

「何が？」

と、俺は聞く。

川口は、

「真理絵ちゃんとの事ですよ。」

黒崎さん、本当は真理絵ちゃんの彼氏じゃないんでしょ？」

と、唐突に聞いて来た。

鋭いなコイツ。

そう思った俺は、

「うん。」

と、答えた。

「じゃあ何で彼氏だなんて？」

「それは、真理絵に頼まれたからだよ。」

「頼まれた?」

と、川口が聞いて来た。

俺はその経緯を川口に話した。

「あの子らしいですね。」

と、川口。

そんな話を話している間に、俺達はリビングにやって来た。

川口は、

「付いて来て。」

と、俺を誘う。

川口に付いて行くと、俺はキッチンへとやって来た。

「ほお。リビングとキッチンが一緒になってるのか。」

俺は一人呟く。

すると、

「グーウ」

と言う音が、どこからか聞こえて来た。

「あ、いけない。」

と、川口が顔を赤くしながら言った。

それに対して俺は、

「気にする事無いよ。」

お昼、まだなんですよ?」

と、川口に聞く。

川口は、

「うん。と言うか、皆も食べて無いと思う。」

と、言った。

「そうか。なら俺が腕を降るってとびつきり美味しい料理を作つてやろう。」

「え!? そんな事しなくても私がやりますから良いですよ。」

「いや、良いって。これは俺からの誕生日プレゼントだ。君は上で待っててよ。」

多分、30分くらいで出来るから、そしてら皆を連れて来てよ。」

俺はそう言つて、川口を二階に歸した。

さて、何を作るか……。

俺は、野菜室を開け、適当に材料を出した。

と言つても、出て来たのはタマネギ3個だけである。

3個か……。俺を入れて7人だから、ちょっときついな。

そう思いながらも、俺はタマネギの皮を剥き、上下を切り落とした。後はチキンブイヨンにオリーブオイル、梅干し2個に出し昆布1枚と塩小さじ1/2、きぬさや10枚。

俺はそれらをキッチンをあさりながら探した。その結果、案外早く見つかった。

「よし。」

俺はそう呟くと、圧力鍋を棚から取った。

此処からが本番。

俺は、梅干しを微塵切りにすると、きぬさや以外の材料を梅干しの種ごと入れて水で15分程煮た。

そして、俺は菜箸でタマネギをつついた。

すると、タマネギに箸がすつと通る。

「このぐらいか。」

そう呟いた俺は、きぬさやから筋を取り、それを加えてさつと煮て最後に塩こしょうで味付けをして終了。

完璧だ。

俺は皿を用意し、タマネギを半分に切つて皿に盛り、皆が来るのを待つ事10分。

皆がりビングへと集まつて来て、

「美味しそうな臭いがするわ。」

とか、

「良い臭い。」

とか騒ぎ出した。

俺は皆に、

「取ったらリビング中央のテーブルに持ってて。」
と、言う。

すると、国枝、真理絵、望田、汀、小田の順に俺の作った料理を持ってテーブルに向かったが、川口だけが残って、

「一人分足りませんよ?。」

と、俺に言う。

俺は、

「タマネギが3個しか無くてね。」

と言うと、

「私と半分個しましょう。」

と、川口が言った。

「え?でもそれじゃあ君の食べる分が少なく。」

「良いんです。私、ダイエット中ですから。」

そう言って、川口はタマネギを半分にし、片方を皿の上に載せてテーブルに持っていった。

ありがとう・・・。

俺はそう思いながら、自分の分の皿を持ってテーブルに着いた。
すると、

「これ、黒崎さんが作ったんですか?」

と、望田が言い、

「男で料理だなんて凄いわ。」

と、真理絵が言った。

「ふつ、騒ぐのは食べてからにしてくれ。」

俺が皆にそう言くと、皆は俺の作った料理を一口食べ、

「美味い!」

と、皆が同時に言う。

「こんなの、生まれて初めてだ。」

と、小田。

それに続き、

「お袋でもこんなの作れないぜ。」

と、汀。

「これ、何て言う料理なんですか？」
と、望田。

「タマネギのポツタラ煮だ。」

俺はそう答えた。

それから暫くすると、俺を含め、全員がポツタラ煮を完食。
「ごちそうさまでした。」

と、皆が言う。

すると、急に川口が立ち上がり、

「うつ・・・うつ・・・うつ。」

と、首を押さえて苦しんだかと思うと、その場に倒れてしまった。

「咲樹ちゃん大丈夫!？」

と、言いながら、小田が川口を揺らす。

「触るな!」

と、俺が小田に怒鳴ると、小田は川口から手を放した。

俺は川口の様子を確認した。

すると、川口の口元からアーモンドの臭いがした。

と言う事は、青酸カリだろう・・・。

「新一君、咲樹どうしちゃったの!？」

と、真理絵。

「死んだ・・・。」

俺はそう呟いた。

「咲樹ちゃんが!？」

と、小田が言うと、皆が一斉に俺を睨む。

「俺・・・疑われてます?」

俺がそう聞くと、

「うん。」

と、皆が頷き、

「貴方が作った料理を食べたからこうなったのよ。
貴方、咲樹の料理に毒を混ぜたんじゃないの!？」

と、望田。

「ちょ、ちょっと待て！確かに作ったのは俺だ。でも、毒なんか盛ってはいない。」

それに、もし毒を盛ってたら俺も死んでっからな。」

と、反論する俺。

「どういう事？」

と、真理絵。

「半分個……。川口さん……。人数分足りないって、俺と半分個にしてるんだ。」

勿論、半分個にしたのは川口さん本人だ。」

「でもでも、その後に毒を盛る事は可能だね。」

ほら、君は咲樹ちゃんの隣に座ったし。」

と、小田が言う。

「そくだそくだ。」

と、汀。

それに続き、

「黒崎。お前という奴は！？」

と、国枝が言い、俺の胸倉を掴む。

「待て国枝。そう言うお前はどつなんだ？」

俺が聞くと国枝は、

「俺はやってねえよ！」

と、俺を突き放す。

「ま、取り敢えず、警察呼んでくれないか真理絵。」

俺は真理絵にそう言う。

真理絵は、携帯を取り出すと、110番に電話を掛けた。

それから暫くすると、一人の刑事と鑑識、監察医が川口家に入ってきた。

「警視庁捜査一課の桑田だ。」

と言って、桑田刑事は警察手帳を見せ、

「話を聞かせて貰おう。」

と、付け足す。
すると、

「こいつだ。こいつが咲樹ちゃんに毒を盛ったんだ！」
と、小田が俺を指差して言う。

桑田刑事は、

「ん？」

と、鼻を鳴らしながら俺を見る。

「おや？黒崎君じゃないか。」

と、桑田刑事。

「黒崎さんを知ってるんですか？」

と、望田。

それに対し、

「知ってるも何も、ここらじゃ有名な探偵だよ。」

と、桑田刑事が言う。

「探偵ですって？」

と、望田。

「嘘だろ？」

と、小田。

「刑事さん・・・俺は探偵じゃなくて、探偵の兄。何勘違いしちゃってんですか!？」

「ああ、そうだったな。」

と、笑いながら言う桑田刑事。

「何だよ。びっくり損じゃねえか。」

と、国枝。

「いや、損じゃないと思うよ。」

と、望田。

「何で？」

「ここらで有名な探偵と言ったら、女子高生の黒崎綾さんでしょ？
その兄って事だけでもかなりびっくりだよ。」

と、汀。

「あ、そつか。」

と、国枝。

その割には驚いてないがな。

と、頭の中でツツコミをする俺。

「まあ、兎に角、これから事情聴取をするんで、一人ずつ順番に話をしてくれ。」

桑田刑事はそう言った。

俺は、面倒な事になったなと思いながら、両手をズボンのポケットに入れた。

すると、右のポケットに瓶の様な物が入っていた。

「何だ？」

俺はそう呟き、それを出した。

取りだした瓶には粉末が入っており、

「potassium cyanide」

と、側面に書いてあった。

シアン化カリウム・・・何でもこんなものが俺のポケットに？

「ねえ、それって薬じゃないの？」

と、真理絵。

「ちよつと見せてみる。」

と、桑田刑事は取り上げる。

「こ、これは!？」

黒崎君、何処にあつたんだね？」

「ズボンのポケットに。」

俺は桑田刑事にそう言った。
すると、

「やっぱりお前じゃねえかよ!」

と、国枝が言い、俺の胸倉を掴んだ。

「ちよ、ちよつと待てつて!それは俺じゃない!

誰かが勝手に入れ・・・はっ!」

「どうしたんだ?」

と、桑田刑事。

「解ったんですよ。俺のポケットに瓶を入れた人物がね。」

「何？他にいると言うのか？」

と言つて、国枝は俺の胸倉を放した。

「ああ……。だが、証拠が無い。」

俺がそう言つと、

「証拠は無くても良い。誰がポケットに入れたんだ？」

と、桑田刑事が聞く。

俺は、ゆっくり手を挙げると、国枝を指差した。

「ちよ、ちよつと待て黒崎！俺が咲樹を殺したつて言うのか！？」

俺はそう聞く国枝に対し、

「川口さんを殺したのはお前じゃない。」

と、腕を組みながら言つた。

「ちよ、ちよつと待ち賜え黒崎君。」

君のポケットに青酸カリの瓶を入れたのが彼で、犯人が他にいてどういふ事だね？」

「無理なんですよ。コイツに青酸カリを盛るのは。」

「どうして無理なんだね？」

「料理を持つて行つた順番です。」

国枝は、一番最初に料理を持つて席に着いた。だからコイツが毒を盛る事は不可能です。」

と、俺は国枝に毒を盛るチャンスが無かつた事を話した。

「じゃあその次だ。」

と、桑田刑事。

「それも無理ですよ。」

考えてもみて下さい。

容疑者は俺を含めて7人です。

先ず、料理を持つて行つた順番は、国枝、真理絵、望田、汀、小田。そして、最後に被害者の川口さんと俺。」

「料理を作つたのは？」

「俺です。でも、この時に川口さんの食事に毒は盛られていませんよ。」

「どうして解るんだね？」

「そうしたら俺も死んでるからです。」

「どういう事だね？」

と、桑田刑事は聞く。

「人数分足りなくて俺と半分個にしてるんですよ。勿論、半分にしたのは彼女だ。」

その後に彼女はテーブルに着いたんです。その間、俺は彼女の料理には触っていません。」

「他に触れた奴は？」

他に触れた奴か・・・。

確か、川口さんが載せた皿に小田が触れていたな・・・。
と、俺は皆が料理を取って行った時の事を思い出した。

「ま、まさか・・・。」

と、俺は呟いてしまった。

「どうしたんだね!？」

と、聞く桑田刑事。

「ちよつと気になる事がありましたね。」

国枝、この青酸カリ、誰かに渡されたとかしなかったか？」

俺がそう聞くと、国枝は俺の耳元で、

「小田とか言うメガネデブに渡されたんだよ。」

と、囁いた。

「それ本当か？」

「ああ。そんで俺、怖くなって、あんたのポケットに入れたんだ。」

「入れたのは何時だ？」

「咲樹が死んで、俺があんたの胸倉を掴んだ時だよ。」

成る程、そう言う事か。

「桑田刑事。」

「何だね？」

「そこにいるメガネを掛けた如何にもオタクっぽいデブの小田が犯人だ。逮捕しろ。」

俺がそう言っていると、小田は慌てて逃げ出した。

「待て！」

と、桑田刑事が追う。

「くそつ、捕まってたまるかよ！」

小田はそう言っていると、その場にずつ転けてしまった。
何とも哀れな。

桑田刑事は、その隙に小田に手錠を掛けた。

「署まで来い。」

そう言っていると、桑田刑事は小田を連れて行った。

後日、小田は桑田刑事に酷く殴られ、全てを自供したと言う。
何はともあれ、こうして事件は解決をし、幕を閉じた。

が、真理絵がおいおいと三日三晩泣き続けたのは言うまでも無かった。

「解ったからもう泣くなつて。」

と、俺は真理絵に言ったが、泣きやむ事は無かった。
やれやれ、こりゃ暫く泣きやみそうも無いな・・・。

そう思った俺は、放って置く事にした。

「じゃあ俺は帰るからな。」

そう言って、俺は真理絵と別れると、一人家路に着いた。

第1話：誕生パーティー殺人事件（後書き）

まあ、最初はこんなもんです。

第2話：帰り道の殺人！（事件編）

「なあ黒崎。七不思議って知ってるか？」

唐突に、隣の席に座っていた亀山 大輝と言う男が話し掛けて来た。彼は、サングラスを掛け、派手な服装をし、教師に隠れてコソコソタバコを吸っている不良だ。俺はそいつに知らないと答えた。

「なら教えてやろう。」

と、亀山は答える。

「教えてくれなくて結構。」

俺はそう言い放つと、推理小説を取りだして読み始めた。するとどうだろうか？

亀山が急に怒って、

「てめえ、俺が折角教えてやろうと言ってるのに嫌だと言うのか！？」

と、言った。

そんな亀山に対して、

「お前、そんなに話たいのか？」

だったら、聞いてやらない事も無いが・・・。

と、俺は本を読みながら答えた。

亀山は突然立ち上がり、

「コノヤロー！」

と、殴りかかって来た。

危険を感じた俺は咄嗟に避け、腕を掴んで放り投げてやった。

亀山はそのおかげで背中を酷く床に叩き付けてしまった。

「あ、今の正当防衛だから、悪く思うな。」

亀山は起きあがると、逃げながらこう言った。

「畜生！覚えてろ！」

「無理！」

俺はそう言って見送ってやった。

「もう、新一つたら。何度言えば解るの？」

と、ふくれながら綾が言った。

「な、何だよ？何かしたか俺？」

「私、何時も言ってるよね？亀山君を虐めないでって。」

「お前なあ・・・あんな不良になんか関わるなよ。」

パシッ！

綾が俺の頬をビンタした。

「ああ見えても亀山君はとても良い人なのよ！？」

なのに不良ってのは無いんじゃない！？不良ってのは！？」

俺は溜め息を吐く。

「お前が亀山を好きなのは良いけど、あんな奴と一緒にいたってろくな事にはならねえぞ。」

パシッ！パシッ！パシッ！パシーン！

綾が往復ビンタをした。

「もう知らない！」

綾はそう言っで、泣きながら教室を出て行ってしまった。

「何だよ、あいつ・・・。」

俺は誰もいない教室で、窓の外を見ながら一人呟いた。

「おい、新一くん。」

偶々通りかかった真理絵が廊下で俺を呼んだ。

俺は廊下に出ると、真理絵を見つめた。

「どうした？何か用か？」

「いや、別に用って程じゃないんだけど、暇だったら一緒に帰ろうかなって。」

真理絵はもじもじしながら言った。

成る程、そう言う事か。

真理絵の気持ちを察した俺は、

「良いよ。俺も今、一緒に帰ろうと思ってた所だ。」

と、思ってもいない事を言った。

「本当！？じゃあ帰りの支度して来る！」

真理絵はそう言って、はしやぎながら教室に戻り、帰りの支度をし
て戻ってきた。

俺は机に置きっぱなしにしてあった小説を鞆にしまい、帰りの支度
をすると、真理絵と共に下校を始めた。

「昨日の新一君、とても格好良かったよ。」

突然、真理絵が昨日の事を口にした。

昨日の事と言えばあれだ。真理絵の友達の家で起こった殺人事件。
あの時、犯人を追いつめたのはとても愉快だった。

「新一君って凄いよね。」

頭良いし、格好いいし。

それに比べて私なんか、バカでブスで何の取り柄も無い……。」「
待て待て。何を言い出すんだコイツは？

「そ、そんな事無えって。」

真理絵は可愛いし、頭もそれなりにキレる。学校での評判も良いと
聞くぞ？」

「でも、新一君には敵わないよ。」

「人間はな、レベルや見た目じゃないんだ。その人の中身、個性が
大事なんだ。」

要するに、俺が言いたいのは、人を見た目で判断するな、と言う事
だ。」

俺、何人生論述べてんだろう？

「ねえ、あれ見て！」

突然、真理絵がある方向を指差しながら叫んだ。

「どうした？」

「あそこ、人が倒れてる！」

人が倒れてる？

俺は真理絵が指差す方向を目で追った。

そこには、男の人が頭から血を流して倒れているのが見えた。
俺達は様子を見に男の下へ駆け寄った。

男は、既に息絶えていた。

左に階段か。

俺は階段を見上げた。

「誰だ!？」

俺は逃げ去った人影に言った。

「待て！」

俺は慌てて階段を上って人影を追ったが、途中で見失ってしまった。
クソッ！仕方がない、戻るか・・・。

俺は男の倒れていた場所へと戻った。

現場には、一人の刑事っぽい男の姿があった。

「君が、犯人を追ったと言う少年だね？」

一人の刑事っぽい男が俺に声を掛けた。

「そうですけど。」

「それで、犯人はどうした？」

「途中で見失いました。」

「そうか。」

所で、犯人の顔は？特徴とか無かったかね？」

「いいえ。暗かったし、慌てていたもんですから、特徴なんてそんな。」

「そうか。」

じゃあ、もう帰って良いぞ。後はこちらでやるから。」

「あの、警察手帳とか見せてくれないんですか？」

「ああ、すまん。今日は非番で持って来て無いんだ。」

怪しい。この人、かなり怪しい。

「真理絵、帰ろうか。」

俺は怪しまれない様に、真理絵と共に男から離れ、こっそりと男の様子を確認した。

思った通りだ。

男が被害者の持ち物を持って行きやがった。

第3話：帰り道の殺人！（解決編）

帰り道、俺と真理絵は殺人の現場を目撃した。

「行っちゃったよ。どうするの？」

「取り敢えず、警察だろ。」

俺は携帯を出して警察を呼んだ。

警察が到着するまで、やれる事があるな。

俺は被害者を調べた。その結果、出て来たものは、財布、タバコ、

ライター、免許証、キーケースの五つ。

キーケースには、複数のキーがあった。

この他にも何か持っていたと思われるが、恐らくさっきの男が持つて行ってしまったのだろう。

程なくして、警察が到着した。

「警視庁の桑田だ・・・って、またアンタか!？」

「いけませんか？」

「いや、別にいけないとは・・・。そんな事より、遺体には触れてないだろうな？」

そう言う桑田だが、当の俺は遺体に触れていた。

「成る程。階段から落ちて即死して訳か。

亡くなったのは、今から5分前だ。丁度、俺達を通りかかった時刻と一緒にだな。と言う事は、17:25か・・・。」

「そうか・・・って、遺体に触れるな!」

桑田は怒鳴った。

「刑事さん・・・怒ると寿命縮みますよ?」

俺は振り向き、そう言った。

桑田は、俺の発言で暗くなってしまった。仕方がない。

「刑事さん。」

無視・・・。

「俺、犯人見ました。」

「何!？」

と、桑田は話に食いつき、

「どんな人物だね!？」

と、怒鳴る様に聞いた。

「まあ、刑事さん。先ずは、落ちつきましょう。」

「すまん。それで、どんな人物なんだね？」

俺は先ほどの事を思い出し、

「刑事っぽい男で、自分で刑事だと言っていました。」

その男、離れた所で様子を窺^{うかが}っていたら、被害者の持ち物を持ち去ったんです。」

と、桑田に話した。

「それで、他に気になる事は無かったかね？」

「気になると言うか、被害者を殺害して逃げる男を見ました。途中で見失いましたけど・・・。」

「関係者は二人いるのか？」

「多分、そうだと思います。」

刑事は黙り込み、何かを考え始めた。

その間、俺は被害者の免許証を見た。

免許証には、小島 明と書かれていた。

「ん、小島 明？」

桑田が後ろで声を漏らした。

俺は桑田に向き、

「知ってるんですか？」

と、訊ねた。

「ああ。そいつ、昨日、うちの署に来たんだ。」

「何の用で？」

「命を狙われてるから助けに来てくれって。」

命を狙われてる？誰に？

よし、少し整理してみるか。

先ず、亡くなったのは、小島 明。

死因は、後頭部損傷によるもの。

逃げる男と、刑事を名乗る男がいる事から見て、小島さんは何者かに狙われていたと考えるのが妥当だろう。

「刑事さん。」

「何だね？」

「今すぐ被害者の交友関係洗って下さい。」

「それなら昨日、被害者が言っていた、3人の怪しい人物を呼ぼう。」

「怪しい人物？」

「ああ。昨日、被害者とあった時、その怪しい人物の事を聞かされたんだ。」

「ま、ちょっと待っておれ。」

そう言つて、桑田は、その3人の怪しい人物を素早く現場に集めた。よし、先ずは、あの女性から話を聞こう。

俺は、増村^{ますむら} 澄子^{すみこ}と言う、ロングヘアでメガネを掛けた若い女性に声を掛けた。

「早速ですが、貴女のアリバイを聞きたいと思います。」

「17：30頃、貴女は何処にいましたか？」

「私は、ピアノのお稽古に行っておりまして、少し前に帰って来た頃です。」

「何時頃ですか？」

「えーと・・・。」

増村は時計を確認した。

「30分程前よ。」

「30分前か・・・。今は、18：00だから、彼女が本当にお稽古に行っていたのなら、アリバイは成立だな。」

よし、次はあの人にするか。

俺は増村に会釈をした後、久山^{くやま} 隆^{たかし}と言う小柄な男性に声を掛けた。
「俺かい？」

俺は、一昨日から友達と登山に行っていて、さつき帰って来たんだ。そうだ、これ、余っちゃったんだけど、良かったら食べる？」
そう言っつて、久山はチョコレートを出し、パキッと割って俺に渡した。

「あ、どうも……。」

俺はチョコレートを受け取り、会釈をすると、高山たかやま 浩介こうすけと言っ被害者の親戚に話を掛けた。

「僕は会社にいたよ。」

「そうですか……。」

俺は高山に会釈をすると、桑田の前に戻った。

「何か解ったかね？」

と、桑田。

「解りましたよ、ハッキリとね。」

けど、刑事を名乗った人はいませんでした。」

「そうか。で、犯人は？」

「あの人ですよ。」

俺は久山を指差した。

桑田は久山を呼んだ。

「何でしょうか？」

「久山さん、小島さんを殺害した犯人は、貴方ですね。」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ刑事さん。」

僕にはちゃんとアリバイがある！」

と、久山は犯行を否定する。

「ほお。だが、この子が貴方を犯人だと言っています。」

久山は俺を横目で見るとこう言った。

「刑事さんはこんな餓鬼の言うことを間に受けるんですか？」

俺はその発言を聞いてブチギレた。

「久山さん、7月の季節は？」

「夏？」

「そう。貴方はこの暑い季節に登山へ行った。こんな暑い季節に登

山へ行けば、溶けるもの溶けてしまう。

しかし、何故、持って帰って来たチョコレートは溶けていないんでしょうか？

まるで、たった今、コンビニで買って来た様な。」

そう言つて、俺はチョコレートを久山に見せ付けた。

「貴方は自ら犯人だと証明してしまつたのです。」

久山は、逃げ場は無いと見たのか、その場に膝を付いて泣き出した。

「全て、全てあいつが悪いんです。」

1年前、付き合っていた彼女を、あいつに取られ。

僕、それを昨日、初めて知つたんです。

だから、今日、現場に呼び出して、彼を殺害しました。」

「その時、逃げたのが貴方ですね？」

「え？何を言つてるんだい？」

僕は、逃げる所は誰にも見られて無いですよ？」

どういう事だろう？

俺と桑田は顔を合わせた。

「ま、まあ、兎に角、署に来てじっくり話を聞こう。」

そう言つて、桑田は久山に手錠を掛け、署まで連行した。

その後、警察の捜査により、現場から逃げる不審人物が発見された。その不審な人物は、あの現場で俺が目にした警察を名乗る男で、ただの探偵だつたそうだ。

探偵が言つには、自分が犯人だと疑われ掛けたので、一旦現場を離れ、再び戻つて依頼料を持ち去つたと言ふ事だ。

全く、金にがめつい探偵がいるとは・・・。

第4話：氷が語る真実

俺は今、真理絵と共にお料理教室に来ている。

「それじゃあ今日は、ケーキを作りたいと思います。」

と、小島 美幸と言うショートヘアの美人な女性が言った。

小島は、此処のお料理教室の先生であり、中学時代の俺の担任でもある。

因みに、彼女は誰にでも人気があり、本気で交際を求めたがる者がいるぐらいの美人だ。

が、実は既婚者で子持ちなのである。

「新一君、卵持って来た？」

「卵？」

「新一君、もしかして、忘れたの!？」

「ちょっと待って。」

それは俺が言いたい。

昨日、真理絵が持ってくるって決めなかったか？」

「そだっけ？」

目を点にする真理絵。

「あらあら、どうしたのですか？」

と、小島が間に割って入った。

「真理絵が卵を忘れて困っているんだ。」

「そう。それなら、冷蔵庫から取って来るわ。」

そう言っつて、小島は教室を出て行った。

「全く……。毎回毎回、お前と言う奴は……。呆れてものも言えんわ。」

「ごめん……。」

俯く真理絵。

「はい、お待たせ。」

小島が卵を持ってやって来た。

小島は、卵を置くと、笑顔でこう言った。

「今度は忘れないでね。」

その時の笑顔は、とても美しかった。

が、それが小島の、最後の笑顔となるとは、この時はまだ知るよしも無かった。

バチン！

いきなり停電が起き、部屋中が真っ暗になった。

「俺、ブレーカー見てくる。」

そう言い残し、俺はブレーカーを見に行った。

「任せたわ。」

小島はそう言つて、俺を見送った。

「あつたあつた。」

俺は呟きながらブレーカーのスイッチをあげた。

「キヤアアアア！」

突然、教室の方から悲鳴が聞こえた。

俺は急いで教室に戻った。

「何があつた！？」

教室に入ると、俺は叫んだ。

「せつ、先生が何者かに！」

と、一人の女性が言った。

俺は小島の下へ駆け寄った。

「せ、先生！？」

俺は小島を見て驚いた。

背中に包丁が刺さっている。息はしていない。

「誰か！救急車だ！」

と、傍にいた男性が叫んだ。

「いや、呼ぶのは、警察だけだ！」

教室にいる数人の顔が固まった。

皆、小島が亡くなった事に驚いている様だ。

「あ、私、警察呼んでくる。」

そう言い残し、真理絵は近くの交番まで駆けて行った。

さて、警察が来るまでに出来る事は、と・・・。

俺は、教室にいる数人に話を聞いて回る事にした。

一人目は、日系中国人の喜屋武 瑠璃。

学校は違うが、俺と同じ高校生だ。

喜屋武 瑠璃の証言では、停電直後、包丁が刺さる様な音が聞こえたらしい。

二人目は、会社員の山本 耕二。

山本 耕二もまた、喜屋武 瑠璃と同じ事を証言した。

三人目は、女子大生の九条 小百合。

九条 小百合も、他の二人と同じ事を証言した。

四人目は、ケーキ屋さんでアルバイトをしている香山 恭子。

香山 恭子は、何者かが小島を刺殺して逃げ去るのを目撃した、と証言した。

そして、最後に、警察を呼びに行った奥村 真理絵だ。

彼女の話は帰ってきてから聞く事にしよう。

因みに俺には、ブレーカーを入れたに行った、と言う立派なアリバイがある。

「新一君、連れてきたよ。」

真理絵が、老警官の銀治郎さんを負ぶって教室に入ってきた。

「彼だけ？」

真理絵は、頷くと、こう言った。

「駐在所には、このお爺さんしかいなくて、仕方ないから連れてきた。」

「これ、人を老人扱いするな！」

ポカッ！

老警官は、真理絵の頭を軽く叩いた。

「痛っ！」

真理絵は涙した。

「それより黒崎君、今度はどんな事件かね？」

と、その前に、わしを降ろしてくれんかのう、おばさん？」

おばさん・・・銀さん、あんたの命、多分無いわ。

「お、おばさん？」

真理絵は、顔を引きつらせながら笑い、手をポキポキと鳴らした。
真理絵の全身から殺意が漂ってくる。

「どりゃー！」

真理絵が銀さんを投げ飛ばし、落ちる前に回し蹴りを放った。

「どわ！」

銀さんはボールの様に飛び、壁に当たって落下した。

「銀さん、大丈夫？」

俺は心配して声を掛けた。

「だ、大丈夫じゃ。」

銀さんは立ち上がって言った。

皆、夢じゃないかと、頬をつまみ出した。

「で、どんな事件だね？」

「見ての通り、女性が背中を刺されての死亡です。」

俺は銀さんに遺体を見せる。

「ほほ。」

銀さんは、遺体を見ると目を丸くした。

「背後から敵を襲ってますなあ。」

「さつきから言っただろ！」

あんたが来る前に、事情聴取とか終わらせたから、あんたは犯人逮捕するだけで良いよ。」

「つまらんの。」

銀さんは落ち込んだ。

「新一君、落ち込んだじゃったよ？」

「気にするな。」

それより真理絵、今トイレに行った香山さんに、目をどうしたのか聞いて来てくれないか？」

「解った、聞いて来る。」

そう言つて、真理絵は香山さんの後を追つた。

さて、その間に俺は、ブレイカーを見に行くか。

大体見当の付いている俺は、ブレイカーを見に行った。

ブレイカーのある部屋は、洗面台があり、その上にブレイカーが設置されている。

他にも、温水器やお風呂、その他色々。

つまり、この教室は、小島の自宅を兼ねているのである。

「何も無いか・・・。」

俺はブレイカーを見て呟いた。

ブレイカーに仕掛けがしてあつたんじゃないかと思つたんだが、見当ハズレだったか。

待てよ？あれを使えば。

俺は閃き、洗面台の物入れを開け、中から工具を取り出した。

よし、此処を回せば外れる！

俺は排水孔のネジを回し、鉄のパイプを外した。

思つた通り、中にゴム付きの重りが入つてやがる。

間違いない、犯人はあの人だ。

俺は中の物を出し、パイプを戻して現場へと戻つた。

「新一君、何処行つてたの？」

真理絵が声を掛けた。

「ちよつとな。それより、香山さんの目は何だった？」

「物貰いだつて。」

成る程、だから香山さんは目にアイマスクを。

「ありがとな真理絵。おかげで犯人が解つたぜ。」

そう言つと、現場にいる全員を、俺に注目させた。

「黒崎さん、犯人が解つたんですか！？」

と、喜屋武 瑠璃が驚いた。

他にも、山本 耕二や九条 小百合も同じ様に驚いた。

「それで、犯人は誰よ？」

香山 恭子が聞いて来た。

「その前に、停電のトリックからお話しましょう。」

「停電のトリック？」

銀さんが疑問の表情を浮かべて聞いた。

「まず、最初に、こういう物を用意しておきます。」

俺は例のゴム付きの重りを取りだした。

「えっと、これはゴムの先端に輪っかを作り、反対側に重りを付けた物です。」

これを、ブレーカーのスイッチに吊り下げて、第一段階は終了です。次に、洗面台の排水孔に氷でフタをし、重りに乗せます。

洗面台はブレーカーからほぼ一直線の為、氷が溶ければ自動的に重りが排水孔に落ち、重さに耐えきれなくなってブレーカーが落ちるという寸法です。」

「待って、それじゃあゴムはどうするの？」

真理絵がそう言った。

「それは簡単だ。ゴムの弾力により、輪っかがブレーカーから外れ、そのまま排水孔に入り込む。」

香山 恭子は、納得すると、こう言った。

「それなら内部にいる人にも犯行は可能だわ！」

「香山さん、その目、どうしました？」

「あ、これ？」

ちよっと、物貰いが出来ちゃって。」

香山 恭子はそう言った。

その発言に対し、俺はニヤリと笑った。

「わ、私が物貰いになった事がそんなに可笑しい訳!？」

キレル香山 恭子。

「違うんですよ、香山さん。」

「じゃあ何よ!？」

「いやね、目の前にいる犯人を追いつめるのが楽しくてね……。そう、香山さん、犯人は貴方です!」

俺が格好良く人差し指で香山 恭子を差すと、周囲の人が驚いた。

「そ、そんな!？」

「香山さんが!？」

「う、嘘だよ、新一君？」

「嘘じゃない。」

香山さん、貴方、本当は物貰いになんかなってないんじゃないんですか？

貴方は、暗闇でも微かに目が見える様にと、わざと片目にアイマスクをしているんじゃないんですか？」

一時の沈黙が終わると、香山 恭子がゲラゲラと笑い出した。

「面白い推理だわ。でもね、犯人は私じゃないわ。」

それに、言っただしよ、犯人が逃げる所を見た、と。」

「おかしいですね。」

貴方が犯人で無いのなら、見える筈が無いんですよ。

犯行当時、現場は暗闇だった。よほど目が慣れていない限り、犯人が刺殺して逃げるのは、暗闇では見ることが出来ないですよ。」

「ぐっ！」

香山 恭子は、その場にしゃがみ込む様にして泣き出した。

「あ、あいつが悪いのよ。あいつが、私の彼を奪って、結婚なんかするから。」

昨日、彼女にその事を聞かされたわ。それで、私、私。

うわあああん！私、先生殺しちゃったよー！うわあああああん！」

香山 恭子は、犯行を認めると、喉が枯れるまで泣き続けた。

「ぐすんっ！」

「香山さん、もう泣かない。」

後は警察で、ゆっくり罪を償って、やり直しましょうよ。貴方にはまだ先があるんですから。」

俺がそう言つと、銀さんは手錠を掛けて連行した。

男女関係のトラブル。それだけの事で殺人とは……。やるせないな。

第4話：氷が語る真実（後書き）

真理絵から一言。

この話を読んでる皆は、人殺しなんかしちや駄目だぞ。くだらない事で、人を殺したら、その先の人生を棒に振るだけ。明るく、前向きに生きよう

それと、今回のトリックにはちょっと無理があり、失敗しやすいです。

第5話：スピードは語る（事件編）

放課後・・・。

「もうやってらんないわ！」

いきなり、ぶちギレた真理絵。

「な、何怒ってんだよ、奥村？」

お前が悪いんだろ？明日が本番だって言うのに、台詞を全く覚えな
いんだから。」

「中村、それ以上言うな。」

中村 なかむら 浩介 こうすけ。

彼は、明日行われる文化祭の催し物、”スピードは語る”と言う推理劇の監督だ。

「黒崎、お前は口出しするな。」

今日という今日は許してはおけない。絶対に覚えて帰って貰うぞ、
奥村！」

「（ああ、まずいよ。お前、絶対殺される。）」

そう、真理絵がキレると、ム力付く奴は確実にのします。

一度、真理絵に殺され掛けた俺が言うんだから間違い無い。

そう思ったのも束の間。

「文句があんならてめえでやれ！」

「ズガン！」

真理絵が中村の顔を殴った。

「おぶっ!？」

顔面が潰れ、彼はひよこがピヨピヨと頭を回転し、そのまま倒れて
しまった。

「（中村さん、ご臨終です。）」

そう思った時、俺と真理絵の目が合った。

真理絵は、俺を見ると微笑み、耳元でこう囁いた。

「もっと、殴らせて。」

おいおいおいおい、まずいぞこりや！

中村、早く目を覚ませ！

って、そう言う問題じゃない。

「ま、真理絵、取り敢えず落ちつこう？」

俺は半分怯えながら言った。

「嫌。」

「ズガン！」

真理絵は、いきなり、俺の腹を殴った。

「ヒューン！」

俺はもの凄いスピードで、壁に向かって飛んでいく。

「コトン！」

足を付け、壁を蹴った。

「ドフィューン！」

俺の体は真理絵を目掛けて飛んでいく。

が、真理絵は素早く避けた。

「ズドーン！」

床に突っ込む俺。

「し、新一君、何やってるの？」

真理絵がとぼけた顔で言った。

「何してるって、お前に……。」

「ズシンッ！」

俺が途中まで言うつと、真理絵が足で俺の背中を踏みつけた。

「（いつてええええええ！）」

俺は心の中で叫ぶ。

「新一君、自分からやって来て、人の所為^{せい}にしちゃ、駄目よ？」

「はい、すいませんでした。」

俺は取り敢えず真理絵に謝った。

全く、この調子で明日の本番は大丈夫なのだろうか？

そう思いつつ、時間は刻一刻と時を刻み、遂に本番当日へ。

「真理絵、台詞覚えて来たか？」

俺は体育館のステージの脇で聞いた。

因みに、この場所は、観客席からは壁が邪魔で中の様子が見えない。

「大丈夫、任せといて。」

「本当だろうな？」

ピンピンした中村が突然現れて聞いた。

「中村君、私を誰だと思ってるの？」

私は、世界一天才な美少女よ？」

「待て、世界一天才は俺だ。お前は世界二だ。」

俺はすかさずツツコミを入れた。

「どっちでも良いけど、お前天才なのか？黒崎ならともかく、暴力魔のお前が。」

中村が言った瞬間、真理絵の強烈な回し蹴りが炸裂した。

「ドフォーン！」

中村がもの凄いスピードで、壁に向かって飛んでいった。

「バキ！」

壁にめり込む中村。

「あんな奴、放っておいて早くやりましょ？」

真理絵は中村をアウトオブ眼中。
放置してしまった。

「真理絵、せめて助けて……。」

「ズシンッ！」

真理絵のパンチが腹に決まる。

「貴方も、壁にめり込む？」

俺は直ぐに後ろへ退き、土下座をして謝った。

「真理絵様、すいませんでした。」

惨めだ、俺が惨めに見えるぞ。

「きゃあああああああ！」

突然、観客席から女性の悲鳴が聞こえた。

その悲鳴は、異常だった。

俺は直ぐにそこへ向かった。

「何があつたんです？」

「カンちゃんが、カンちゃんが刺されてるんです。」

女性はカンちゃんとやらにしがみついたまま言った。

「離れて！」

俺はカンちゃんとやらから、女性を離した。

カンちゃんとやらは、胸にナイフを刺されて倒れていた。

「亡くなってる。」

脈をはかった俺は、思わず言った。

「（ん、何だこれ？）」

俺は被害者に手に、スペードのトランプが握られている事に気付いた。

スペードのトランプ、一体何を意味するのだろうか？

第6話：スピードは語る（解決編）

学園祭当日、本番を前にして殺人事件が起こった。

被害者は、胸をナイフで一突きされ、死亡していた。

手には、スピードのカードが。

これは一体、何を意味するのだろうか？

「何であんたが此処にいるんだ!？」

桑田はそうとうキレていた。理由は解らない。兎に角キレているのだ。

「ここは、俺の学校ですが・・・。

で、警部、何でキレてんですか？」

俺は恐る恐る聞いた。

「休暇を利用して女房と旅行に行こうと思ったら、事件で呼び出さ

れてムカムカしてるんだ!」

「それは、御愁傷様ごしゅうしょうさま・・・。」

「こうなったからには、あんたの責任だ!30分以内に解決しろ!」

桑田は無理なお願いをして来た。

「そ、それは、いくらなんでも、無理かと・・・。

てか何で俺!？」

「いいや、お前なら出来る!と言う訳で、発見者を含めた5人の容疑者を集めて来た!話を聞いて解決しろ。」

理由は答えねえのかよ!？」

「いやいやいや、容疑者だけ呼ばれても・・・。」

本当にその通りである。

「すまん、被害者の身元がまだだったな。」

警部はそう言つと、警察手帳を取り出した。

桑田の記録によると、被害者は、神谷かみや 霧子38歳。

職業はマジシャン。

本日は、姪の神谷かみや 竹子が活躍をする舞台を見る為にやって来た。

死因は、心臓に刃物が刺さってしまった事によるショック死。
遺体の状況から、死後数分と見られる。

死亡推定時刻は、午前10:00頃。

第一発見者の証言によると、体育館に入って来た時には、既に倒れていたらしい。

また、当時の現場は、朝方の為か、来客が少なかった。

当然、この状況なら、誰にも気付かれずに殺害が出来る。

そして、問題の5人の容疑者。

この5人を紹介しよう。

一人目は、元自衛隊の小島^{こじま} 隆38歳。

神谷 霧子の友人で、息子の活躍を見に来た。

因みに、今は普通のサラリーマンである。

アリバイは無い。

二人目は、狩屋^{かりや} 貴之40歳。

彼には色々謎が多い為、桑田が容疑者として連れてきた。

神谷の元恋人。

アリバイは無い。

三人目、黒田^{くろだ} 伸介40歳。

本日は弟の活躍を見に来た。

職業は無職。

神谷の元夫で、口論をしている所を目撃されている。

アリバイは無い。

四人目は、浅間^{あさま} 拓也38歳。

神谷と同じマジシャンで双子の兄妹だ。

姪の活躍を見に来た。

アリバイは無い。

そして、最後に、第一発見者の小玉^{こたま} 哀20歳。

彼女のアリバイは、桑田の後輩刑事の必死な捜査で裏が取れている。

「桑田くん・・・全員アリバイ無いじゃないですかぁ・・・。」

俺はわざと顔を引きつらせながら低い声で言った。

「そ、そんな事言われても・・・。」

桑田は小さく呟いた。

「ま、良いや。犯人解ったし。」

俺が言うと、容疑を掛けられた5人の方々は、驚いた様子でこっちを見た。

「君、妹を殺した犯人が解ったって、本当か!？」

浅間が言い寄る。

「浅間さん、話しますから落ちついて下さい。」

そう言つて、俺は浅間を落ちつかせた。

「黒田さん、一つ聞きますが、口論の理由は何ですか？」

「それは、やり直そうと話を持ちかけたら、口論になったただけだ。だからって、俺は殺してないぞ!」

黒田は怒鳴った。

「解っています・・・。」

狩屋さん。元恋人と言う事ですが、何か原因があつて別れたんですか？」

「それは、彼女が留学するって言うんで、別れたんだ。何故そんな事？」

「いや、特に理由はありません。」

さて、本題に入りますが、小島さん。

神谷 霧子を殺害した動機は何ですか？」

容疑者全員、小島に顔を向ける。

「お、俺が殺したと言うのか？冗談は顔だけにしてくれ。」

俺は、やれやれ、と呟いた。

「小島さん、冗談で犯人にする訳がありません。」

貴方が殺したんでしょ、神谷さんを・・・。」

「面白い。俺が殺したと言う証拠を見せてみる。」

小島は余裕の顔で言つた。

「証拠？」

そんなものではありません。」

「おいおい。」

呆れた顔をする桑田。

「何だ、証拠が無いんじゃないや、俺を犯人にする事は出来ないな。」

小島は笑って言った。

「証拠はありませんが、あるですよ……。貴方が犯人だと言うダイイングメッセージがね。」

「何！？」

「スペードのトランプ。被害者が握っていました。」

「それが何なんだ？」

「スペード、クラブ、ダイヤ、ハート。この四つにはそれぞれ意味があるんですよ。」

「意味？」

小島は首を傾げた？

「ハートは聖杯、ダイヤはお金、クラブは棍棒、スペードは剣……。これは、それぞれの職業を象徴しているんだ。

聖杯は僧侶、お金は商人、棍棒は農民……。そして、剣は軍人。つまり、軍人〓自衛隊で、犯人はあんただ。」

小島は脱力するかの様に膝を付いた。

「あいつが、あいつが悪いんだ！いつまで経っても金を返さないから！俺は、俺はああああ！」

小島は泣いた。

「小島 隆。神谷 霧子殺害容疑で逮捕する。」

そう言つて、桑田は手錠を出し、彼に掛けた。

「解決時間10分だ。」

桑田はそう言い残し、小島は連れて出口に向かった。

「許さない……。」

浅間が低い声で呟く。

「うわあああああ！」

浅間は叫ぶと、小島に突っ込んで行き、懷から包丁を出す。

「グサッ！」

「あつ・・・ああ・・・あ。」

小島の背中から血がポタポタ垂れる。

「浅間さん、何て事を!？」

俺は驚いた。

「お前の所為で、お前の所為で俺の妹は!」

浅間はそう叫んだ。

小島は脱力し、バタツ、と音を立てて前に倒れた。

「妹が受けた苦しみ・・・お前も味わえ!」

浅間は小島に向かって叫んだ。

「あ・・・あ・・・さ・・・ま・・・。」

小島はそう言い残すと、息を引き取った。

桑田は手錠を取りだした。

「浅間 拓也。小島 隆殺害の現行犯で逮捕する。」

「カシャ!」

桑田は浅間に手錠を・・・いや、自分の手に手錠を掛けてしまった。

「な、何で!？」

「浅間さんが手を引いたからだよ。」

俺は呟いた。

「こんな所で捕まる訳にはいかない!」

そう叫んだ浅間は、真理絵を人質に取った。

「一歩でも動いてみる。この女の命は無いぜ。」

そう言つて、浅間はナイフを、真理絵の首に当てた。

「バカ・・・。」

俺は呟いた。

「己、女の子を人質に取るとは!」

桑田は叫んだ。

「浅間、直ぐにその子を解放するんだ!」

桑田は怒鳴った。

「その必要は無い。」

俺は桑田に言つた。

「何故だ！？放っておいたら、彼女死んでしまうぞ！」

「いや、死ぬのは浅間だ。良く見てろ。」

桑田は、浅間を凝視する。

「やれ。」

俺は真理絵に言う。

真理絵は、浅間にの腹に、肘パンチをくれてやった。

「がはっ！？」

浅間は口から血を吐き、ナイフを落として気絶し、真理絵に寄りかかる。

真理絵は微笑むとこう言った。

「眠ってるだけだから安心して。」

こうして、浅間は逮捕され、事件は幕を降ろした。

にしても、真理絵って、本当に人間か？

疑問を抱く俺であった。

第6話：スピードは語る（解決編）（後書き）

やべ、つついサイボーグの乗りで書いてしまった。
まあ、設定上はサイボーグとリンクするから問題無いけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7468a/>

黒崎新一の推理日誌

2010年10月8日15時34分発行